さなぎ

前川　美和

「さぶちゃん、遊ぼう！」夏休みをもてあました多恵は朝から三郎を誘いに来た。
「おっちゃんは？」
「お家」
「ふうん」
多恵の父は三ヶ月ほど前、会社を首になってから、新しい仕事が見つからず、多恵も近づけない空気を漂わせていた。
「さぶちゃん家、お茶のいい匂いがするね」
「お茶の葉っぱ、煎ってるからな」
三郎の家は昔ながらのお茶屋さん。小さな作業場が多恵の住んでいる長屋の裏にあった。多恵とひとつ上の三郎は兄弟のように育った。
「虫網、持って行って、蝶、捕ろう！　多恵ちゃん、この虫籠、首から掛けといて」
「うん」
朝から日差しは強く、蝉の声が暑苦しい。公園まで走っていった二人は蝶や蜻蛉を追いかけて、網を振り回したが、一匹も入らなかった。鳴き声を辿って、木に留まっている蝉を捕まえたのだが、ジージー鳴きながら暴れるので、三郎も怖くて網から取り出せなかった。
帰る途中、生垣のところにアゲハ蝶がたくさん飛び回っているのを見た。目を凝らすと、葉のあちらこちらに茶色や緑色の幼虫がいた。二人は夢中になって幼虫がモゾモゾ動くのを観察した。
「多恵、この小さい茶色の、持って帰って育てる。この子のお母さんになるんだ」
多恵は幼虫の付いた枝を折って、持って帰ると、空き箱に立て掛けるように入れた。五ミリくらいの虫はしばらくすると、頭を上下に動かして葉を食べ始めた。一生懸命食べて、時々お尻から丸いウンチをポロポロ落とすのを、多恵は飽きもせず眺めていた。
幼虫は毎日生垣から取ってくる葉をひたすら食べて大きくなった。ある日、体をくねらせながら皮を脱ぐと、それを自分でムシャムシャ食べてしまったので、多恵はびっくりした。
虫の動きを目で追い、葉を食む音に耳を傾けていると、父親の罵声も母親の涙も遠くに霞んでいった。

幼虫は脱皮を繰り返し、緑色の体になった。頭の方に目玉のような模様があって、触ると、オレンジ色の角を出して変な匂いがした。やがて、緑色の幼虫は自分の吐き出した糸で体を枝に固定し、動かなくなった。死んでしまったんじゃないかと心配になって三郎に聞くと、

「さなぎになったんだ。もうすぐ蝶になって出てくるよ」と教えてくれた。

「さなぎから出てくるとこ、絶対見るんだ」

多恵はさなぎを虫籠に移して、そのときを待った。

さなぎの存在を忘れかけた頃、さなぎの中の色が紫色に変わってきたので、蝶が出てくる瞬間を見逃すまいと、虫籠を目の前において、夏休みのドリルを始めた。羽化を待つまでの時間つぶしのはずが、いつの間にか算数の計算に集中してしまっていた。何か気配を感じ、ふと目を上げると、もう蝶がさなぎから出て、羽を乾かしていた。

「えっ？　そんな・・・」

美しいアゲハ蝶だった。多恵は楽しみにしていた羽化の瞬間が見られず、とても悔しかったが、自分の育てた幼虫が蝶になった姿を見て、誇らしい気がした。三郎に報告して、二人でアゲハを放してやった。アゲハは何回か二人の頭の上を旋回してから、青い空に吸い込まれていった。

次の日、暗くなってから三郎がやってきた。折り取った枝を多恵に差し出しながら、

「このさなぎ、やるわ。蝶、出てくるとこ、今度は見逃すなよ」

「うん、ありがと」

何日か経って、さなぎの色が黒っぽくなったので、多恵は急いで三郎を呼びにいった。

「あれっ、おっちゃんは？」

「仕事」と多恵は弾む声で答えた。

「そうか」二人は顔を見合わせて微笑んだ。

さなぎを前に、多恵と三郎が息を殺して、その瞬間を待っていると、さなぎの背中が割れて、成虫が姿を現した。

「あれっ、これって・・・・・・・蛾？」

「・・・・・・・・・」

「もう、さぶちゃんたら、どこで捕ってきたん？　このさなぎ」

「あそこになかったから、自転車で・・・・・・」

「・・・・・・ありがと」

「うん」

二人の声がいつまでも長屋の陽だまりに響いていた。

（原稿用紙四枚）